
上野和男先生を送る

山田 慎也

国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系の上野和男先生は、2010年3月末をもって本館を定年退職される。先生が退職されることで、研究部民俗研究系（民俗研究部）において歴博民俗展示開設時に本館職員として草創期を経験した人は皆無となり、民俗研究部の創設については、経験の時代から、伝承への時代へと大きな節目を迎えることになった。こうした節目となる民俗研究系を含めた歴博もその状況は当時と全く異なっており、現在、民俗展示も新たにリニューアルを計画し平成25年3月にオープンを予定している。その大きな変革の時に上野先生を送り出すことになり、大きな時間のうねりが感じられる。

さて上野先生は、1944（昭和19）年5月12日東京都荒川区に生をうけられ、1960年には明治大学附属明治高校に入学した。在学中には地理研究部に所属し、福島県南会津郡檜枝岐村の出作り小屋と木工品などの調査を行い、その成果を『地理研究』に発表するなど、高校時代から民俗に関する調査研究を進められ、その才を発揮されていた。1963年には明治大学商学部商学科に進学し、社会学研究部に入り、三重県北牟婁郡海山町白浦（現在の紀北町海山区白浦）の調査を行うなど、その関心は深まっていた。1967年明治大学を卒業され、東京教育大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程に進学した。明治大学での卒業論文「岩手県気仙郡三陸村下甫嶺の社会組織」の調査をもとに、「三陸海村の親族組織—岩手県気仙郡三陸村下甫嶺—」を1967年『民族学研究』に発表し、日本の親族の社会人類学的研究に大きな影響を与えたときいている。そして1970年に修士課程を修了された。

1972年に明治大学政治経済学部助手に着任された。1976年には政治経済学部専任講師、さらに1979年には政治経済学部助教授に昇任された。この間多くの調査をなされ、なかでも1975年から1979年には、人文社会科学の9つの学会が共同で調査を行う「九学会連合奄美調査」に参加し、鹿児島県大島郡瀬戸内町管鈍、喜界町滝川を調査されており、以後の研究に展開している。

また本館との関わりは、歴博開設以前からあり、開設準備の1981年には、民俗展示の展示プロジェクト委員となり、さらに共同研究「儀礼と芸能における民俗的世界観に関する研究」（代表：山折哲雄）の共同研究員となって明治大学在職の折から総合展示開設に関わっていた。そして1984年には本館民俗研究部助教授に着任された。その1年後には現在の第4室がオープンし、まさに第4室の創設の推移を経験していたのであった。1992年には民俗研究部教授に昇任され、1999年には本館運営協議員になるとともに、総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻教授を併任し、大学院教育にも参画された。さらに法人化に伴うさまざまな制度改革の中、2003年には最後の民俗研究部長として民俗研究部の最後を見て取られた。翌2004年には、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の企画連携室員として機構の運営にも参与され、情報共有化委員会委員、連携研究委

委員会委員なども歴任されている。

さて上野先生は、日本の家族、親族研究において社会人類学的な立場から日本社会の多様性について地域的差異の類型化研究を発展させた功績は大なるものがある。日本の社会構造の地域性研究は、農村社会学などの分野において社会経済的な側面を中心に、同質論的な類型論がおもに展開されたが、その後、社会人類学的な視点からの日本の多様性に関して異質論的な類型が展開され、家族、婚姻、親族、村落組織などの文化要素の類型をふまえて村落社会を全体として構造を把握しようとする研究が盛んになった。なかでも異質性に注目することから、宗教、祭祀、儀礼なども重視して分析を進めて、その体系化が図られ、その一翼を上野先生は担っていかれたのであった。なかでも、親族組織の多様な構成原理を示されただけでなく、位牌祭祀のあり方や先祖の名を子孫が受け継ぐ慣習である祖名継承法をとおして祖先観の多様性をあきらかにし、日本の社会構造が決して同質的ではないことを解明した点は大きな寄与と思われる。

こうして歴博においては、創設以来共同研究の主要なテーマであった「都市」と「基層信仰」の双方に関わっておられたが、とくに「日本における基層信仰の研究」の第2期において、「家族・親族と祖先祭祀」(1986～1988)を、また「日本人の名前と社会：その歴史と構造」(1992～1994)の研究代表者を務めた。そして「日本における基層信仰の研究」第1期～第3期の総括的研究として、「祖先信仰と日本の基層信仰」(1993～1994)の代表となり、歴博の共同研究を推進していったのである。さらにもう一つの課題である「都市」研究においても、「日本における都市生活史の研究」において第1期と第2期の総括代表者(1996～2001)となっている。

また、研究部の事業に関してはデータベースなどとともに特に映像には強い関心を示されていた。民俗研究部の事業として立ち上がり、現在では共同研究形式によって制作が継続している「民俗研究映像」では、初代研究部長の坪井洋文氏の逝去により、第一作の「芋くらべ祭の村—近江中山民俗誌一」と関連3作品を橋本裕之氏と岩本通弥氏とともに制作された。民俗研究映像では、研究者の視点から製作会社の協力を得て映像の民俗誌を作成するものであり、坪井氏の遺志を引きついで制作は大変であったと思われる。一方、文化庁との協力により制作会社に依頼しての記録映像制作事業である「民俗文化財映像」もあった。これにも上野先生は熱心に担当され、「ナゴメハギとアマハゲ：秋田山形の来訪神行事」(1997)、「国東の神まつり：大分県大田村のとうや行事」(2000)、「豊作を祈る：下野の天祭」(2001)、「久井稲生神社の御当行事」(2005)、「壱岐の舟競漕」(2006)などの制作を担当されたのである。しかしこの事業は2008年度をもって中止となっている。その他にも都市祭礼について千葉県佐原市を素材として、「佐原の町の二つの祭—八坂神社夏祭と諏訪神社秋祭—」(2002)、「新宿諏訪神社秋祭」(2001)、「本宿八坂神社夏祭」(2002)などを制作され、民俗学における映像制作に寄与された。この間には歴博での映像制作に関し諸制度を整備していったのであった。

さて上野先生の思い出として、まず浮かぶのはその几帳面な性格であろう。過去のさまざまな歴博のことに関して聞きに行くと、すぐその当時の書類を出してこられ、教えていただいたことが多々あった。こうした側面は調査に際しても発揮されており、沖縄のアンガマ調査に同行した折りには、過去の丹念なフィールドノートに驚いたことは決して忘れない。そしてフィールドの人々との丁寧で和やかな調査はまた上野先生の人柄を感じさせるものであり、それが社会構造の調査とい

う細かい丹念な研究に反映していると思われる。

一方で調査におけるタフさもまた上野先生は持っておられる。共同研究において奈良の調査に同行したときには、厭うことなく東京から奈良まで自らの車で往復された。特に夕方から夜に掛かっても、私は運転できなかったため、先生が連続して運転されたが、少しも疲れを見せず、東京まで送っていただいたのには驚いたものであった。また民俗文化財映像の「若狭の六斎念仏」の制作が終わり、現地のお礼の上映会のあとに、歴博で講演会があるということで、あいにく交通が不便なところであったため電車等では間に合わず、先生は夕方までの上映会を済ませたあと、車で夜を徹して帰っていった思い出がある。

今改めて先生のご健勝とこれからの調査研究のご推進を切にお祈りする次第である。

(国立歴史民俗博物館研究部)